



## 『剣道を楽しむ』

東京都  
東京修道館  
中学2年生 宮城歩実

今、ぼくは剣道が本当に楽しいと思う。館長先生を始め、たくさんの先生方、先輩方に支えられ、素直な気持ちで剣道に取り組めるようになったことを幸せに感じている。

昨年の夏休み、僕は中学校の剣道部を辞めた。家族と引っ越しをしてまで、剣道の仲間を求めて入学した中学校。中体連での成績を残したいという目標を持ち部活を続けてきた。しかし、入学をして半年を過ぎた頃から違和感を感じ始め、昨年の夏、とうとう耐えられなくなってしまった。このままいたら、剣道に対して道場で学んできたことが、ゆがめられてしまうような気がした。大好きな剣道をしているのに、ストレスが大きくなっていくのが嫌だった。悩みに悩んだ末、僕は退部を決意した。

「修道館に来てやればいい。」「剣道は楽しくやれ。」

部活を辞めた事を、館長先生と監督の岡本先生に報告した時、お二人はこうおっしゃった。詳しい事情は何も問わず、全てお見通しかのように、即座にそう言葉を掛けて下さった。中体連での目標に未練があって、転校することも考えていた僕は、その言葉で、気持ちが楽になった。

「そうだ。道場で思う存分、稽古をすればいいんだ。」

「先生方から積極的に学び取ろう。」

2学期を迎えた僕は、放課後、靴を履きかえると、これまでとは違う友達と校門を出て、これまでとは違う時間の電車に乗り、一度家に帰る。宿題を終わらせ、おやつを食べて、再び電車に乗る。行き先は道場だ。これまでは部活があって、来たことのない曜日の稽古は、顔ぶれも違って新鮮だ。僕がいることに「あれ？」という顔をする人もいるけれど、皆、何も聞いてこない。心の中で「ありがたい。」と思った。こうして週4日から5日の道場通いが始まった。

毎回、稽古をつけて頂いた先生方からアドバイスを頂き、次の稽古でそれを頭に置いて取り組んでいる。それでもすぐに出来るようになるわけではない。何度も、何度も、同じ事を指摘される。そしてまた稽古する。一度は出来たつもりでも、再度指摘される事もある。館長先生に稽古をつけて頂いて、少し違う内容になった時、「新しい課題を頂けた。」と、うれしくなる。まるで、言葉ではなくても「お前の次の課題だ。」と、稽古で語りかけて下さっているようだ。

また、青年部の先生方も、試合で勝てない僕に、試合の組み立て方や技を、具体的に教えて下さる。時には、実業団の稽古に連れて行って下さったり、休日の自主練習に誘って下さったりして、同年代との稽古ではできない「思いっきり挑む事」も教えて下さる。

こうして館長先生も、先生方も、僕に「まだまだ、へなちょこ。」と、手の届きそうな一つ上の課題を与えて下さる。僕は、それに少しでも近づきたくて、竹刀を振る。繰り返される課題と稽古。たったそれだけの単純な事のように見えて、とても深い事のように思う。

進路についても、「剣道は高校からだ。」と、皆さんが真剣に考えて下さる。僕の気持ちを確認しながら、決して押し付けず、色々な情報を集めては、あれこれアドバイスをして下さい。

皆、まるで『家族』のように厳しく、そして温かい。今、僕が竹刀を交えて教えて頂いたり、学んだりしている事は、言葉で表すのは難しいけれど、剣道の「技」だけではない「何か」なのだ。この「何か」を求め、一つ一つを振り返り、また前を見ることの繰り返しが、「剣道の楽しさ」だと思う。そしてこの繰り返しが、何年か、何十年か先の自分への贈り物になっていたらいいと思う。その時の自分が、誰かに先輩として、勝敗だけでなく「剣道の楽しさ」を伝える事ができたらと思う。

今、こんなにも素直な気持ちで、楽しく剣道に取り組めるように支えて下さっている先生方や先輩方、仲間、そして家族に感謝し、今日も竹刀を握ろう。